

かたる

人生 仕事

女優

浅利香津代さん(71)

▶▶ 4

談

ババ亡くし涙舞台
けがにも泣かされる

~1980年、35歳の浅利さんは水上勉作・演出の「釈迦内柩唄」で主演舞台を踏んだ。秋田県花岡町(現大館市)で中国人労働者が一斉蜂起し、弾圧を受けた「花岡事件」がモチーフだった。

芸術祭で優秀賞に

花岡鉱山のそばでさげすまねながら生きる遺体焼き場の家族の物語。全編

た。

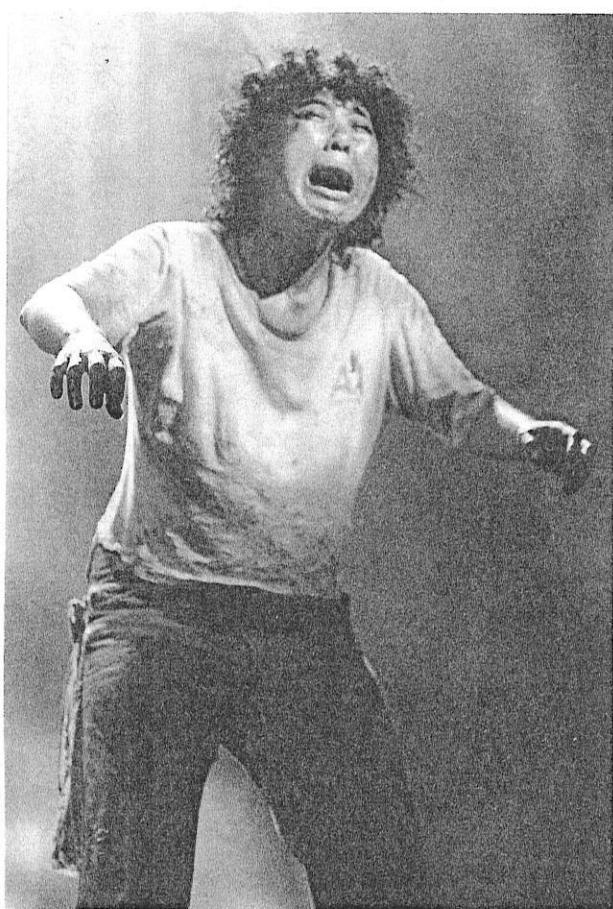
新聞記者や演劇評論家た

ちが「こんな方言劇、前進

座では初めてですよ」と絶

賛してくれました。周囲

~38歳で近松門左衛門の舞台「女殺油地獄」に出演



舞台「釈迦内柩唄」で、浅利さんは遺体焼き場の家族の悲しみ、切なさを全身で表現した

た。

新聞記者や演劇評論家た

ちが「こんな方言劇、前進

座では初めてですよ」と絶

賛してくれました。周囲

~38歳で近松門左衛門の舞台「女殺油地獄」に出演

んだ父を焼くためにかまどを掃除する場面が幕開きです。かまどには並と特等があり、泣きながら「おど(父さん)、特等で焼ぐがらな」と前に焼いてこ

私も続いて「あさり、かずを張り上げた。これは死んだババの置き土産だなって思えました。

「釈迦内柩唄」は全国各地で計650回ぐらい公演しました。1日に3回公演する時もあり、叫んだり怒鳴ったりの連続で声帯を使い、巡業の合間にのどを手術して何とか乗り切りました。

新闻記者や演劇評論家たた。
ちが「こんな方言劇、前進
座では初めてですよ」と絶
賛してくれました。周囲

~38歳で近松門左衛門の舞台「女殺油地獄」に出演

秋田弁の舞台でした。お母さんを「くされたばかりの水上先生が貧しく育つた自身の境遇を重ね合わせて作品にした。私もその年2月にババ(祖母)を亡くし、涙で目がかぶれるほど泣いた。舞台は先生と私の深い思いがあふれています。私が演じる「藤子」が死

に推されて文化庁芸術祭に参加したら、個人でまさかの優秀賞をもらえたんです。

その年はちょうど前進座の創立50周年に当たり、歌舞伎座で記念公演がありました。代表の中村翫右衛門先生を中心団員が袴姿で並び、先輩が口上で私の受賞を披露してくれました。刺されて死ぬ場面で必ず床

に膝を打つんです。サポートを痛めて1年で降板。前回も退団することになりました。何十回も膝を打つうちに水がたまり、正座もできなくなってしましました。

「ああ、前進座ではもうやつていけない」と絶望的な気持ちになつて。当時、劇団は生活するのがやつとの月給でした。ジジババ(祖父母)も「くなつていて仕送りもなく、病院に行くお金もない。やむを得ず前進座を辞め、友人のスナックで皿洗いさせてもらつ」と決めました。

ところが、そこからが急

(聞き手は生活文化部・成田浩一)
田浩一)

|| 次回は10日掲載